

---

# 時雨音

りもこん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時雨音

### 【著者名】

りもこん

### 【あらすじ】

目が覚めたら寺で無一文、着流しざんばら頭の姿。  
そんな男の人生の1ページのお話です。

右手で草履を持ち、左手でまんじゅうを持つ。  
俺の足の裏は、素足でも硬い。

着流しの裾をめくつながら走る。  
後ろから勢いよく罵声が飛んでくる。おい待て。このやつ。  
待てと言われて待つわけがない。  
食つたばかりでもまだまだ余裕がある。  
元陸上部をなめるな。

食い逃げの基本は腹八分目だ。

たらふく食つてしまつたら、横つ腹が痛くなつてとてもじやないが  
走れない。

罵声がだんだんと遠くなつていぐ。

そこの呉服屋を曲つて裏路地に入れば、もう大丈夫だらう。

一気に身体を傾けて勢いよく右に折れる。

猫が一匹、驚き飛び跳ねる。

スピードを落として左に曲がり、足を止めた。

耳を済ましてみる。人の気配はしない。

家の壁に背中を当ててゆっくりと路地を覗き込んでみる。誰もいな  
い。

草履をぽとっと落とす。

足の裏をはたいてから草履に指を引っ掛けた。

大きく開いた着流しの袖に左手を突っ込んでまんじゅうをしまつ。  
右手も袖に突っ込み両腕を組みながら歩き出す。  
とりあえずいつもの寺にでも行くか。

俺は逃げてきた路地に出なによつに寺へと足を向けた。

その寺は小さな山の中腹にある。

すきま風がよく通り、賽銭箱に金は入らず、住職の代わりに猫と鳥  
しかいない小さな寺だ。

俺はそこで目覚めた。  
確かに死んだはずだったのに。

今は江戸時代だろうか、ここに来てから一週間は経つ。  
最初は訳がわからなかつた。

いや、今でも訳がわからぬ。

レインボーブリッジが見える、港湾関係の会社が立ち並ぶ場所。  
そこから身を投げたはずだった。

都会でも夜の海は暗く、夏でも海水は冷たかった。

俺は膝を抱えて丸まりながら底へ底へと落ちていったはずだった。

あんまりオカルトとかは好きではないし、信仰が厚いわけでもない。  
だが身を投げたのがきっかけだからか、状況を受け入れるのに時間  
はかかるなかつた。

小さな寺の中で目が覚めたとき、おれは海から這い出したのかと思  
うくらいに汗を搔いていた。

最初は天国か地獄かなのだと考えていたが、今ではそのどちらでも

ないのだろうと思つてゐる。

魂なんであるとは思つてはいなが、俺の魂が時代を超えて誰かの身体に乗り移つたのかとも考えたが、寺に転がつてい汚い柄鏡に曇り氣味に写る顔は、確かに俺の顔だった。

シャツにチームではなくて服装は藍色の着流しに草履。髪の毛も伸びていて、いわゆるざんばらカットでやつになつていた。

なにはともあれ、腹は減る。

寺から降りて街へ行き、一日に一度か一度の食い逃げをして飢えをしのいでいるのだが、これだけ食い逃げをしているのだからそろそろ街にも行きづらくなつてきた。

## その一

「じんまりとした山を登り、寺に着く頃にはあたり一面が茜色に包まれていた。

いつも通り、人の気配は全くない。

階段なんでものはなく、ただの土の坂道を登ると目の前に寺がある。両脇には松の木やら柳の木やらがあり、奥は竹林になつていて。

俺は寺の中には入らず、賽銭箱に腰をかけて夕日を眺めた。木々の中から見える太陽は大きかつた。

まるで昔話の一節みたいにカラスがあーあー鳴いている。街や村の子ども達はそろそろ家路に着くのだろうか。今の状況をいくら考えた所で答えはでない。

考えるべきことは明日はどうやって過ごうとかといふこと。どうやって生きようか。

・・・・・生きる、か。

今の状況になつてから感じたことがある。

朝は日の出とともに目が覚め、夜は日の入りとともに寝ることだ。明かりといえば月明かりと蠟燭くらいしかないから当たり前といえば当たり前だが。

夕日が沈めば寺の周りは真っ暗になる。

最初は不気味に感じたが、今ではなにも気にならない。  
快適とはとてもじゃないが言えないけれど。

蠅燭を盗んできて寺の中で灯そつかとも考えたが、灯したところでするこじもない。

風が通り抜けた。

思いのほか冷たく、ひとつ身震いをしてから寺の中へ入り戸を閉めた。

朽ちた仏像になんとなくただいまと語りかけ、床に寝転がり天井を見上げる。

こうしていると、とめどもなく様々な考えが頭の中をよぎる。強く目をつぶってから力を抜いた。

俺は寝ることにだけに意識を集中した。

肩が痛んでおぼろげに日が覚めた。

床は木の板だから、横を向くと肩が痛い。

寝返りをうつたときに日が覚めてしまったのだろう。戸ががたがたと揺れていて、風の音を鳴らしていた。日の光は差し込んでいないからまだ夜中だろうか。

身体を起こして、壁に寄りかかりり座りながら寝てみようとしたが、どうにも寝付けない。

板の隙間から月明かりが差し込んでいる。

満月かどうかは分からぬが、今日は月の明かりが強い。少し外を歩いてみようか。

怖いもんなんてなにもないぞ。

そう思いながら戸を半分ほど開け、ふと見をやる。俺は声も出せずに口を開き、背筋が凍りついた。

女がいる。

白っぽい服を着た女だ。

女は俺には気がついているのだろうか、一いち方に身体は向けているが正座をしてうなだれている。

髪は顔を全て隠すほど長い。

音を立てないようにぐるりと戸に背を向けて、ゆっくりと座った。

あれはなんなんだろうか。人間なのか幽霊なのか。

でもある意味、俺だつて幽霊みたいなもんだ。きっと平氣だ。しかしその根拠のない自信は一瞬にして崩れ去った。

「二へ三・・・三へ四・・・」

俺はぞうとす。

「憎い・・・憎い・・・」

おこおこ、やめてくれよ。

「二クイ・・・二クイ二クイ・・・二クイ二クイ二クイ・・・」

思わず目をつぶり耳をふさぐ。  
すると何も聞こえなくなった。  
一瞬だけ考えこむ。

いつもものは耳をふさごしても聞こえるもんじやないのか。

俺は恐る恐る目を開ける。

俺の目に、目を見開いた女の目玉が飛び込んできたら嫌だなと思つたけれど、いらない心配だったようだ。  
耳をふさいでいた手を外す。

すると女の細い声が聞こえる。

「憎んでも仕方ないと今はわかっています」

女は泣いているようだった。

「じつはいつもかっこいいのでしようか

女は続けた。

「私はあんなところへ嫁ぎたくなんてありませぬ」

女はすすり泣いてから、呟いた。

「・・・死んだほうがましなのです」

何時の時代も、色恋沙汰はうまくいかないもんなんだな。

いつの間にか俺の恐怖心はなくなっていた。

よく知らない女の、憎しみといつよりも悲しみが伝わってきた。

## その四

女の声は聞こえなくなつたが気配はまだ消えない。

俺は戸に寄りかかつたまま、背中をこするようにしてゆっくりと座つた。

月明かりは依然として強い。

身を投げる前、俺は普通のサラリーマンだった。

朝の8時から夜の11時くらいまでひたすら働くサラリーマン。

恋人とは別れて半年が経つていた。

努めて5年以上経つていたけれど、日が経つに連れてやりきれない思いばかりが募つていつた。

今思えば疲れきつていたのかもしれない。

死のうとせずに会社を辞めればいいだけだったのに、なぜかそれが世界の終わりのように感じていた。

結婚しているわけでもないし、子どもがいるわけでもないのに。

あの女は死のうとはしないだろうか。

この時代の人間の寿命は分からぬけれど、平成の時代ほど長くはないだろう。

けれども何十年もの間、耐え切れるのだろうか。

それとも決断してしまうのだろうか。

俺には関係のない話。

むしろ力になりたいと思つても、なんの力にもなれない。

そのまま倒れこみ、肘を枕にして、もう一度眠る。  
妙な緊張感を感じたせいか、よく眠れそうな気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2270ba/>

---

時雨音

2012年1月8日20時46分発行